

シベリア史論

松田 寿男

一 シベリアの土地と住民

シベリアの沿革を語ることは、決して容易ではない。というのも、実は古い記録がほとんど残っていないからである。現在我々の手元にある資料は、たいていロシアとの交渉が生じてから後のもので、それ以前の事情を伝えたものは、ほとんど皆無に近い。ただ、中国やモンゴリアの歴史の中に、シベリアに関する情報らしいものが、断片的に、しかもごく僅かに、書き留められているが、それすら、広いシベリアから見ると、南側のごく一部分に関するものに限られている。従ってその大半の地域は、今から四百年ほど前までは、まったく暗黒の幕に蔽われていたといえるのである。

さて、我々は一口にシベリアと呼んでいるが、それは実に広大な地域で、いうまでもなく北アジアの全体を含める。従って、その内部の様相はまこととりどりで、決して一様ではない。しかし大局からすれば、そのなかにほぼ三種の地帯を区別することができよう。すなわち、この巨大な体軀の中央部には大森林地帯が蟻まり、その北側には北極海（または北氷洋）に沿う帯状のツンドラ（凍土）地帯が横たわり、反対の側、つまり森林地帯の南のモンゴリアやジュンガリア、カザフスタンなどの乾燥した内陸地との接壤部分には森林性ステップとなっている。森林性ステッ

プは、一種の漸移地帯で、今日ではロシア移民以来の努力によって農耕地と化しているが、古いころはやはり森林地であり、それが自然や人力によってステップ化ないし耕地化されたものと認められる。

しかし、面積からいうならば、この三地帯は決して均衡を示さない。むしろシベリアの本質は森林地帯であつて、その南北両側のわずかな部分がそれぞれの自然条件によって変貌しているにすぎないといつても、過言ではなさそうである。この大森林地は、一般にタイガと呼ばれるが、それこそ原生林が涸もなく続き拮っている。現に我々が富士山麓で観光用語として使っている「樹海」という言葉が、かなり適切にその様相を表現するようである。しかも、この大森林地は、ただアジアの北部だけに限らず、ウラル山脈を越えて、その西方にも這い拡がり、ヨーロッパ、ロシアの北半分を埋めつくして、スカンディナヴィア半島にも達している。まさしく亜欧大陸の北部は樹海なのである。なお、アメリカ大陸の北部もまた同様であることは、周知の事実であらう。

こう観察すると、シベリアはだいたいに於いて森林を特色とする土地であるといえよう。まさしくそれは「森林アジア」にほかならない。むかしモンゴル人は、彼らの北方に住む人たちを「森の民」(ホイーイン・イルゲン)と称していた。まことにシベリアの住民にふさわしい言葉ではないか。

それならば、そのいわゆる「森の民」は、どんな種類の人たちであつたか。

試みにシベリアの人種分布図を開いてみるがよい。これほど多種多様の人種を、しかも複雑に組合わせた土地は、おそらく世界のどの部分にも求められないであらう。この細かなモザイクを示すそれぞれの民族は、通常、旧シベリア族と新シベリア族、さらに、近世に進出してきたロシア人(スラヴ族)とに別けられる。しかし人種の帰属からいえば、旧シベリア族は古くシベリアに蔓延していたいろいろな民族を混合し、古住アジア族と総称されるものにほ

かならない。後から分布した意味で新シベリア族と呼ばれるものは、ウラル＝アルタイ族に所屬する。

いま簡単に触れたように、古住アジア族は、今でこそ衰頹して見るかげもない状態に陥っているが、非常に古いころには、アジア大陸の北部に広い分布とかなりの活力を示していたらしい。現在、北海道や樺太に残留するアイヌ、樺太島や黒竜江河口部に散布しているギリヤーク、アメリカ大陸極北部やグリーンランドを舞台とするエスキモー、アレウト諸島に住むアレウトなどもこれに属するが、シベリアに残っている主要なものとしては、チュクチ、コリヤク、カムチャダル、ユカギルなどが挙げられる。しかし、もともとこの古住アジア族という用語は、インド＝ゲルマン族とか、ウラル＝アルタイ族とかいう使いかたとは違って、全く便宜のものにすぎない。もちろん、チュクチとコリヤクとの間に言語の類似があつたり、エスキモーとアレウトとの間にも同様な点が指摘されてはいるが、それにしても古住アジア族という名称の中に包含されるたくさんの弱小民族は、各自が血においても、言語においても独自性が強く、相互に近縁の關係をもたない。つまりそれぞれが一個の独立民族であつて、それらを仮りに總括して古住アジア族と呼ぶだけのことである。太古のシベリアには、こういう独立民族が多数に散居したが、後述の新シベリア族の移住によつて、しだいに後退し、萎縮したと認められる。それゆえに、例えば、チュクチがアナデル河と北極海との間に住み、コリヤクがアナデル河南、カムチャツカ半島の中央部にかけて残り、カムチャダルがその南、すなわちカムチャツカ半島南部を占め、ユカギルがヤナ河下流からコリマ河下流にわたつて留まっているように、だいたいに對してシベリアの東北隅に追いつめられた形を呈しているのである。

俗に古住アジア族といわれるものだけでも、これほど多種多様であるが、新シベリア族すなわちウラル＝アルタイ系のもは、もっと複雑である。もちろん広いウラル＝アルタイ族の全体からすれば、シベリアに入りこんでいるも

のはほんの一部分にすぎないが、それにしても、その主要な分枝のほとんどすべてが、この土地に見出されることは、特筆に値しよう。周知のように、ウラル \parallel アルタイ族にはウラル派とアルタイ派とが区別される。ウラル派は、さらにフィン \parallel ウグル族とサモエド族とに大別されるが、しかし両族の間には体質上でも言語上でも顕著な相異があつて、はたして両者をウラル派として一語にしてよいか、どうか疑問の余地が残されている。従つて、ウラル \parallel アルタイ族の主流を、フィン \parallel ウグル、サモエド、アルタイの三者と見る人もある。

フィン \parallel ウグル族では、ウグル系オスチャクとヴォグルとが、オビ河流域からウラル山中にかけて分布し、サモエド族は主としてエニセイ・オビ両河の下流を含める極北部を占めているが、別にイルティシュ河畔にはサモエド系オスチャクの居住が認められる。面白いことには、フィン系のヴォグル族は「スオミ」と自称している。この称呼は今日のフィンランド人のそれと全く同じであつて、「両者の血縁関係の深さを語っている。しかも、フィン \parallel ヴォグル族は、単に上の二つだけでなく、スカンディナヴィア半島のラップ族を初め、エストニアの住民やマジアルすなわちハンガリー人なども同系であるから、つまりヨーロッパの東部や北部にまで拡つているのである。それゆゑに、いわゆるウラル派の諸族は、その昔、ウラル山脈を中心にしてその東西にわたつてかなり広い分布を示していたわけで、今日シベリアに住むものは、結局その東端にすぎないといえよう。

次にアルタイ族は、改めて説くまでもなくトゥングス、テュルク、モンゴルの三派で代表される。トゥングスは、シベリア中央部の大半にわたつて分散して、最も広い地域を占め、またマンチュリアにも蔓延しているが、もともとは、マンチュリアの方が彼らの本地らしく、この方面からだんだんとシベリアに進み拡つたものと思われる。テュルク族が、アルタイ山脈の東西を故郷とし、そこから中央アジア一帯に拡がり、そして西アジアにまで及んだ大民族で

あることは、周知であらう。今日その支脈としてシベリアに見出されるものは、レナ河流域を中心とするヤクートと、西南シベリアのステップに入りこんでいるテュルク・タールとである。また、モンゴル族が現にモンゴリアやジュンガリアの居住者であることも説明を要しないが、シベリアには、その一部であるブリアートが、バイカル湖地区に居住し、現在ブリアート・モンゴル自治共和国を形成している。

シベリアの人種分布は、大局だけに止めても、なおかつこれほど錯綜している。しかし、畢竟このような様相は、文字上から何一つ手掛りがつかめないシベリアの古史に対し、何ものかを暗示しているようである。この意味で、第一に我々の注意をひくのは、エニセイ河中流域に見出されるオスチyak族、すなわちエニセイ・オスチyakである。これは、フィン系やサモエド系のオスチyakと違って、古住アジア族の一であるとされる。従って彼らの存在は、嘗ての古住アジア族の或時期における生活圏の西端と考えられよう。このように、現在の古住アジア族の分布に一つの飛地ができてきているというのも、実はマンチュリア方面から北上したトゥングスの仕業であるらしい。というのも、彼らはシベリアに流れこんで古住アジア族の住域を中斷し、その中間にひろがったことを思わせるからである。このような変化があった後に、テュルク系のヤクート、続いてモンゴル系のブリアートが進出したと考えられているが、この二つの事件は、トゥングスの場合に較べて、さして古くはないようである。

ヤクート族の北進は、モンゴリアにモンゴル族の勢力が昂まり、かつ拡大した結果と推測される。それより前に、北モンゴリアに地盤をもっていたのはテュルク族であったが、彼らはモンゴル族の発展に伴い、圧迫をうけて四散し、その際に、一部のものが北方に追われ、それがバイカル湖地区へ、さらにレナ河上流地方へと移っていったらしい。ところが、西暦第十三世紀の初めになって、あのチンギス・ハアンの出現によって表示されたモンゴル族の一段

と強力な發展期を迎えられると、その一派のブリアートが、モンゴル系北進勢力としてバイカル湖岸へと押進む。そのためにヤクートは、レナ河に沿って北へ北へと追われつつ、自らもトゥングスを追ひ、遂に北極圏内にまで住域を拡張する。トゥングスの一部が、東方ではスタノヴォイ山脈を越えてオホーツク海岸に新天地を求め、あるいは西方において、エニセイ河畔に移動し、現にこの方面に「トゥングスカ」という呼称を残したのも、まったくこのような刺激によるものらしく、同時に、古住アジア系の諸族も、トゥングスやヤクートの転移のあふりをくって、ますます分布地域を狭める、といった悲運に遭遇したのであらう。

二 森林の生活

鬱蒼と茂って涯もない原生林、樹海を貫き流れる大河の畔などで眠っていたのではないか、と疑われるほどのシベリアの住民にも、前節でのべたような大きな転変が、いくたびとなくくりかえされたようである。近世になって、ウラルの山を越えたロシア人によって巻き起された渦紋は別としても、なお、黒竜江の沿岸とか、イルティシユ河の流域とか、さてはセレンゲ河からバイカル湖にわたる地区とか、シベリアへの門口は、昔からいくつか開いていた。我々が古記録のなかに、たまさかに見出す「森の民」の情勢は、このような導管から漏れているのであるが、それにしても決して遠地の様子まで伝わったわけではない。従って、古いシベリアの事情を知るには、現在展示されている生活を基にして、前記の門口あたりの部分に関する僅かな記録の解明から始めなければならない。

まず我々は、シベリアの東北の片隅に追いつめられているチュクチが、一般に馴鹿チュクチ (Reindeer Chukchee) と沿海チュクチ (Maritime Chukchee) とに、同じくコリヤクが馴鹿コリヤク (Reindeer Koryak) と沿海コリヤ

ク (Maritime Koryak) とに、大別されているのに着眼しよう。馴鹿チュクチ・馴鹿コリヤクという表示は、馴鹿を唯一の伴侶として密林のなかを転々する生活に因む。沿海チュクチ・沿海コリヤクという言葉は、寒冷な極北の海辺に粗末な小屋を営み、魚肉を主食とし、魚皮や海豹の皮を着る生活に由来する。この種の人たちが好んで飼っているのは犬である。それは単に番犬としてだけではなく、何十頭かの犬に引かせた橇が雪の平野を疾走する光景を想うがよい。

もちろん、生活の形に見られるこのような相異は、必ずしも古住アジア族に限らず、サモエードやトゥングスにも見受けられる。馴鹿トゥングスに対し犬トゥングスという別けかたが行われるのもその一端を示す。もうすこし細かに観察すれば、例えばレナ河の一支オレクマ河畔から北マンチュリアの嫩江あたりにかけて散居しているオロチョンは、「馴鹿オロチョン」とも呼ばれるように、純然たる森林生活者で、馴鹿トゥングスの典型的なものとされるが、黒竜江の下流域を占めているゴルディ (ゴリド) は俗に「魚皮ゴリド」といわれ、黒竜江を溯る魚類や海獣を捕えて生活している。

さて、森の民の生活の基本が、樹海の中に棲息する野獣を狩猟し、その肉を食料に、その毛皮を衣料とする形にあることは、いうまでもない。そのためには、どうしても獲物を求めてしばしば居住地を変えなければならぬ。従って彼らの屋舎は、毛皮や白樺材などを材料とする天幕の類で、そのような天幕や日用品などを運搬したり、橇を引かせたり、あるいは騎乗に用いる動物として、馴鹿が使用される。何しろ厳寒の森林であるから、馬や牛などは役に立たない。かつ馴鹿も、牛馬と同様、乳を飲用に、肉を食用に供することができる。しかもこの動物は、草を喰わず、森林地に生ずる苔類の一種を食用とするのであるから、ステップでは生活がむずかしい。このような理由から、森林生

活者と馴鹿とは、切りはなして考えられないほど深い関係に置かれているのである。一例として、唐の時代の中国人が聞き知った森林民に関する事情のうちにあらわれる馴鹿生活を紹介する。

木有りて草無し、地に苔多し、羊馬無く、人は鹿を豢（やしな）うこと牛馬のごとし。惟だ苔のみを食す。俗、以て車を駕す。又た鹿皮を以て衣と為し、木を聚めて屋を作る。——新唐書回鶻伝附載の鞠伝。

馴鹿生活の由来がどれほど古いか、理解できるところ。

しかし、このような生活を送る森の民でも、附近に大河が流れているような場合、彼らが河中にすむ鱒、鮭、鯉魚、鮭魚、江豚などに眼をつけないはずはない。従って、昔から狩猟に伴って漁撈が盛んであったのも、もっともな次第である。ところが、おもしろいのは、彼らの漁法で、我々が日常見聞しているそれとはたいへん違っている。もちろん彼らも釣をするのが、多くの場合は漁叉、三叉槍、鉗などを使い、網を用いないのである。我々の常識からすれば、漁業は網による共同作業によって集団統制を強めるが、この状態では林中の野獣を射殺し刺殺するのと同じ意味しかもたないではないか。いいかえれば、彼らが漁撈に使う槍や鉗は、要するに狩猟具の延長にすぎないではないか。もとより近ごろはロシア人から網罟の法が伝わり、そのために漁獲の量も激増したといわれる。けれども、古代シベリアの漁業は狩猟の副業ないし変型にすぎなかったと判定しなければならぬ。

それならば、沿海チュクチ・沿海コリヤク、また犬トウングスなどの表現で知られる海岸生活はどうであったか。この場合、まず前述のものと違う様態として注目されるのは、定住あるいは半定住という点であろう。いかに粗末な小屋にせよ、また夏と冬で居住地を変える風習があったにせよ、そこに展開するのは村落生活であり、森林を彷徨する生活とは、かなりな懸隔がある。けれども、たとえ村落の生活でも、寒冷きわまる気候と、ほとんど漁撈だけに依存

する生活のために、この村落は社会の単位となるまでには向上しえなかつたように察せられる。これにつけて想起されるのはチュクチの言葉に「アットワト・イイリン」というのがある。「小舟一杯」という意味だが、これは海豹狩りの際に漁舟に乗る全員が共同生活をするところから起つた言葉で、沿海チュクチの社会単位とされている。しかしその社会的意義は、後述の「巻狩り」の場合と、だいたい近いものと考えてよからう。極北の沿海部では、これ以上の社会発展は望めなかつたわけである。

ロシアからの移民によつて発達したといわれる農耕生活を除いて、古いシベリアの生活様式を探ってみると、だいたい右のようである。それならば、このような生活は、アジアの歴史にどんな作用を宮んだであらうか。もちろん前述のように直接それに触れた史料はないから、モンゴリアやマンチュリアの動きに関連して伝わつた森林生活者の足跡を、すこしばかり辿つてみよう。

第一に、最も古い史実として、中国に秦や漢の王朝が立つていたころ、北方のモンゴル高原における強力な遊牧国として知られた匈奴に関する史伝の中に、丁零（また丁令、丁靈とも書く）や堅昆が登場している。丁零は、バイカル湖南やセレンゲ河流域を含める地域に、狩猟と遊牧の生活を示しつつあつた漠北テュルクを指し、堅昆は後に黠戛斯などと書かれたキルギスで、エニセイ河の上源、ケム河盆地に拠つていた。丁零の一部は後に高車といわれ、西暦第五世紀の後葉にはアルタイ山脈の西、天山山脈の北、すなわちジュンガリアに勢力をのばして、この方面に独立国を建てている。

もちろん高車国ができたころ、その民は明かに遊牧を事としているが、遠い昔の彼らはむしろ森の民であり、狩猟生活者であつたと思われる。堅昆すなわちキルギスがケム河盆地の狩猟民であつたことも、いろいろな証拠がある。

とくに注目されるのは、西暦第六世紀の中葉にアルタイ山から勃興し、モンゴリアやトゥルクキスタンをそっくり含める大遊牧国を出現させた突厥であつて、この部落も、もとを洗えばこの山中に狩猟と鍛冶の生活を示した森の民にほかならなかつた。いな、それだけではない。モンゴル帝国の創立者チンギス汗を産んだモンゴル部族さえ、古くは狩猟生活者であつた。この部族がまだ黒竜江上流の弱小勢力にすぎなかつたころ「弋獵を以て業となす、其の居を常とせず」(契丹国志)と伝えられている。森林の中を流転しつつ狩猟で生活を支えていたことが明かにされるではないか。

森の民から草原の民へ。狩猟生活から遊牧生活へ。このような転向は北方アジアの歴史を考へる場合に、一つの定石として銘記する必要があるらしい。トゥングス族を分類するのに、生活型の違いから、馬トゥングス (Horse Tungs)、馴鹿トゥングス (Reindeer Tungs)、犬トゥングス (Dog Tungs) の三を数える人がある。また、草洋トゥングス (Steppe Tungs)、森林トゥングス (Taiga Tungs) と二分する人もある。前者の馴鹿トゥングスと犬トゥングスとは、後者の森林トゥングスに相当するが、このことはすでに説明済みである。それでは馬トゥングスとは何か。これは草洋トゥングスにほかならないのであつて、ステップに家畜を放牧し、馬を乗用とする生活から名付けられている。それならば、モンゴリア、ジュンガリア、カザフスタンなどのステップで示されている遊牧生活と較べて、決して違つたものではない。それゆゑに、この形は、トゥングスからすれば、必ずしも本来の姿ではない。森林生活から脱却し、馴鹿を馬にのりかえた様態であつて、トゥングスとしては第二的な生活型と認められる。

ところが、ここにもうひとつ閑却してならないことがある。それは、たとえ野獸を狩り、河辺に魚を求めた森の民でも、獸肉や魚肉だけで生活したとはいえない点である。彼らが林間や河谷に自生する植物、果実、例えば野韭、山丹草、人參、松実、杜梨などを食用にしたことは疑いなく、その片鱗は中国の史書から窺える。さきほど唐時代の記

録に、モンゴリアの北に住む森林部族に関する報道が見えていることに言及したが、そのなかに都播（または都波）という部族を伝え、彼らが貂や鹿の皮を衣料とする狩猟民であること、また稔穡の法は知らないが、その土地に生ずる百合草の根を採取して食用としている旨が述べてある。百合草はおそらく山丹草と思われるが、とにかくこの記事は、北方狩猟民における食用植物の利用を明示した最も古い史料の一つといつてよい。

シベリアの民は大半は、このような状況で近世を迎えたと思われるが、一方、もう一步進んで原始的耕作の段階に入つて、狩猟の傍ら農作を営む部分も現われたに違いない。河谷の肥沃な土地を、石や木で作つた器具で耕やし、だんだんその耕地が痩せてくると、他の土地に移転する。なにぶん寒地のことだから、耕作に従事する期間は短いにせよ、少なくともその期間だけは一定の地区内に滞留しなければならない。もちろん、そのような状態に定住、定着といった表現は許されないにしても、狩猟民の流転生活が、そのためにかなりの制限をうけたことは明かである。こうなると、やがては家畜の飼育が併行されることも考えられよう。

とはいえ、シベリアは酷寒地帯であるから、その大半はこのような植物栽培など思いもよらない。しかし気候条件がやや緩やかな南側では、相当古いころからこのような傾向を示した地区が指摘される。バイカル湖地区に移住したブリアートーモンゴルにもその例が見出せよう。また、もつと古く遡つてみるならば、今から一千年以上も昔に、ケム河盆地に展示された農耕風景こそ、我々の刮目に値するものではなからうか。前述の都播や鞠などの森林民を伝えた「新唐書」が、やはりその紹介者としての名譽を帯びる。すなわちこの書に、キルギス（黠戛斯）を記し、禾、粟、大麦、小麦、青稞などの耕種を述べてあるのがそれである。この記述から約五百年後、モンゴル帝国時代になると、この部族が居た土地、すなわちケム河盆地の事情もすっかり明かになったようで、「地は沃衍で稼に宜し、夏に播て

秋に成る、耘籽を煩わさず」(元史地理志、西北地附録、謙州の条)とさえいわれ、その地の農耕の現実を伝えてい
る。再び「新唐書」に立返って、北マンチュリアの森林に住んでいた室韋という部族に目を注ぐと、彼らが木製の犁
を使用していること、また穀物の収穫が多いことなどが特筆されている。キルギスや室韋は、いうまでもなく森林狩
猟生活者であるが、以上の報道によって、早くから農耕が併用されていたことがわかる。

もちろん我々は、シベリアの農業におけるロシア移民の大きな役割と限らない名譽とを信じて疑わない。しかし、
寒地農耕の素地という問題になると、その萌芽が森林地の南部を占めた古い部族の間に早くから生じていたことを認
めなければならぬ。たとえ一年の半分は結氷するような河畔でも、森の民の関心さえ注がれるならば、立派に耕地
が拓かれた形跡を、このように辿ることができるのである。狩猟生活から農耕生活へ。ここにも森の民にとって一つ
の進路が見出されていたわけである。さきほど我々は、森林民がステップ生活に移行して、始めて強い政治力を発揮
した例を、古代テュルク帝国やモンゴル帝国に求めた。同様に、森林生活者が、農耕に関心をもつか、ないしは農耕
に従事するかによって、大きな勢力を振る基礎を作った場合も、史上に絶無ではない。満洲族がそのよい例である
う。

満洲族は、松花江が流れる北マンチュリアを母体とするトゥングス一派である。それゆえに彼らは直接にはシベ
リアの歴史に関係をもたない。しかしその生活環境はシベリアと同様であり、また彼らが本来の森林狩猟民であった
ことにはなんの疑いもない。その森林民の満洲族からは西暦第十二世紀初頭に「女真」が抬頭し、遂には中国北部をも
占領して、有名な金帝国を立てているではないか。さらに、それから五百年ほど後になると、清帝国がやはり北マン
チュリアの同族から発祥したではないか。この両帝国の発展には、いろいろな理由が求められよう。しかし、両者と

もに、狩猟生活者のままで、直ちに農耕中国の支配に成功したのではなく、その中間の過程として、松花江やその支流が作った河谷で農耕を営み、耕獵併用の形のうちに自己の進路を見出していることを忘れてなるまい。

三 森林アジア史の現実

北方アジアの森林生活者が辿った足跡を、以上のように見極めてみると、彼らが狩猟民の状態そのまま、強い政治力を發揮した例は、遺憾ながら一つも見当らない。たとえシベリアだけに限らず、マンチュリアを含めてみても、また同様である。彼らは、多くの場合、ステップにおける牧畜、河谷における原始的農耕、ないし鉞物の採取や鍛冶というような過程に到達して、始めて發展の方向を見定めているのではないか。

考えてもみるがよい。千古の密林の中に鹿や貂や狐などを追って暮すだけなら、多数の人員の集団行動の必要はない。むしろそれが不便な場合が多い。おそらく一張の天幕と日用品、そして飼いなれた馴鹿をもつ一族こそ、そのような活動に最も便利なのではあるまいか。「旧唐書」の契丹伝に「獵には部を別ち、戦には同行す」とある。たとえもつと大がかりな行動が許される事情にあつても、また氏族や部族の活動範囲が限定されていたにしても、森林中の狩猟は、せいぜい二三の家族による共同動作の程度に止まる。それゆえに、シベリアでは、一族ないし二三家族の集団が、社会単位であり、経済単位でもあり、同時に政治的単位ともなっていた。しかも、家族の人口が増せば、けつきよく新しい家族が分裂し、袂を別つて行動するしか方法がつかないわけである。そこに大きな政治力が現われる筈はないではないか。

そうはいうものの、私は古代シベリアの住民もまた、古代民族に通有な氏族組織をもち、血縁関係を重視したこと

を疑わない。現に最近まで氏族組織を維持し続けたものもあり、また、共同の祖先に関する伝説を保存していることから、嘗て氏族社会を経験したと判定できるものもある。しかし一方、たとえ氏族の感念は強固でも、狩猟生活そのものの性質から、氏族の実質が崩されてしまう傾向が強かったことも否定できない。その極端な例として、ユカギル (Yukagir) や一部分のトゥングスに見受けられるように、ある一定の土地内に長く住みあつた家族の群が、まったく血縁のないものまで加えて氏族を形成する現象さえ指摘されている。(Czabicka, *Aboriginal Siberia*, p. 36 以下) なお、彼らの精神生活は、おしなべてシアーマン信仰の形をとっている。それは自然界の苛烈さから、ただ恐怖の信仰にとどまるにすぎず、畏敬の態度、慈悲のはぐくみにまで昇められていない。この点も彼らに大同団結の機運を与えなかつた一つの理由ともなるであろう。

もちろん彼らの狩猟法は、前述のような小規模のものに限ってはいない。彼らの狩猟の対象となる動物が群棲する場所とか、頻繁に往来するような場所などを選んで、囲いを作り、そこに動物どもを追い込んで捕えたり、あるいはそのような場所に柵を設けて、陥穽や自動的な弩を仕掛ける。または巻狩りを催す。野獣に対するだけでなく、魚類を捕獲する場合にも、やはり河の中に柵を設けたり、ヤナを仕掛けたりする。このような狩猟や漁撈は、比較的多くの人の参加を必要とするから、ややもすれば弛みがちな団結をひきしめ、ひいては氏族組織の維持に大きな力ともなる。しかし社会的集団は、決してそれ以上に強大とはならないのであつた。

事実、歴史を調べてみると、シベリアの土地に強力な統制があらわれたことは、太古以来ただの一度も認められない。ただし、シベリアという名が由来したシビル汗国、またロシアの東侵に猛烈な抵抗を示したブリアート、モンゴルなどが、それに近い例として取上げられるかもしれない。シビル汗国は西暦第十六世紀の後半にロシアに滅ぼされ

るまで、イルティシユ河畔のトボルスク附近を中心として独立していた国であつて、シベリアの歴史に困らしいものを求めれば、これがほとんど唯一といえよう。しかし本をただせば、この国はモンゴル帝国の一部キプチャク汗国の王族が建設したのであるから、いわばモンゴル政権の出店であり、ステップ国家の分身にほかならない。次にブリアー・トゥーモンゴルは、漠北にモンゴル帝国が成立したころ、セレンゲ河の彼岸に居たブルグウトという一部族の一支として始めて歴史の舞台上に登場したものの (D'Ohsson, *Histoire des Mongols*, Vol. I. Note 2)。そのころは、彼らも典型的な森林生活を示したが、バイカル湖地区でロシアの軍勢を阻止したころは、牧畜も農耕ともに盛んであつた。けれども、結局この部族もまたモンゴル勢力の北進を表示し、同じくステップ政権の出店にほかならないのである。このように考察すれば、シベリアの歴史には、政治的統一がなく、狩猟的小部族の分散、割拠、孤立に終始したといわなければならぬであろう。

けれども、このような考えは、実はシベリア史の皮相にとらわれているのである。その実体をもうすこしさぐつてみるならば、この地方が昔から孤立していたとか、あるいは多くの小部族や氏族群が完全な割拠状態にあつたとか、簡単に論じ去ることは、とうていできないであろう。アジア大陸は、いかに広くても、コロンブスが発見する以前のアメリカのような立場に置かれていた地域は、どこにも求められない。その事情を次になるべくはつきりさせてみたい。

いま私が、いったいシベリアでは何のために狩猟が行われたのであろうか、と質問したら、おそらく、何をつまらぬことを問題にするか、それは食物や衣料を獲得する手段ではないかと、答えられるにちがいない。それならば、シベリアの古住民は、何の目的があつて、黒貂や狐、また栗鼠などまで狩したのであろうか。これらの動物は、世界中

の人たちの欲望をそそりたるほどの貴重な毛皮をもっている。しかしそれらの肉は、よほどの飢餓状態でもなければ、食用とはならない。食糧にあてるものとしては、鹿、馴鹿、麋、馬など絶好のものがあり、しかもそれらの皮は衣類の材料としても好適である。それゆえに、おそらく上記のような貴重な毛皮獣は、シベリアの森林民がまだ生段階に踏み留まっているころには、他の獣類をさしおいてまで血眼になって捜し求める対象とはなっていないので活の初歩的はなかるうか。重ねていえば、それによって衣食併せて足りるような動物が専ら狩猟されていたころでも、貂、狐、栗鼠といった毛皮獣が衣料として珍重されなかつたわけではない。しかし、この種の毛皮獣は、シベリアの民が、遊牧や農耕を立前とする地域、例えばモンゴリアとかトゥルキスタンなどと何らかの交渉をもつてから後に、始めてたいへんな熱意で狩猟されるようになった、と私は考える。従つて、このような毛皮獣狩猟、いわば奢侈品獲得の傾向は、他の経済地域における生活の向上に伴つて昂つていったにちがいない。かつ、この傾向が、ステップの民や農耕民と隣接し、ないしは連絡し易かつた部分にまず強まって、やがて奥地に波及したであろうことも、十分に推察できるであろう。要するに我々は、貂、狐、栗鼠などの毛皮獣を専ら追求したのは、シベリアの狩猟民が他の経済地域と交渉をもち、両者の間に交易が存在した証拠と認めなければならぬ。

モンゴル帝国創業の次第をモンゴル人自身が書き残したものとして有名な「モンゴル秘史」すなわち那珂通世博士の名訳による成吉思汗実録を繙くがよい。そのなかには「黒き貂鼠の裘」がいかにも珍重されていたかを推察できる記事が少なくない(例えば同書七五―六頁)。いな、それよりもなお五百年も前に、モンゴリアに勢威を振つたテュルクの可汗が、自らの言葉で石に刻みつけさせた。いわゆる突厥碑文(またオルホン碑文)には「貧しき民を我富ましめたり、少き民を我多からしめたり」といった可汗の功績をのべて「……金を、艶ある銀を、断片の絹を、種子ある黍

を、肥えたる馬を、牡馬を、黒き貂を、蒼き栗鼠を、我がテュルクに、我が民に、獲て我与えたり」(小野川秀美氏訳による)と明示してあるではないか。いうまでもなく、断片の絹(絹のキレ)や種子のある黍(黍のツブ)は中国からの輸入品、そして黒き貂、蒼き栗鼠こそは、森林民の産物にほかならない。ちょうど同じころ、中国を支配していた唐朝の記録「新唐書」の回鶻伝を見ると、モンゴリアの北方にすむ森林諸部族から貂皮を産することに異常な関心が寄せられている。しかも、この王朝が、北方の砂漠草原地に武力を行使して、モンゴリアを縦断して森林地方に達する商業路を確保した際の記録によれば、この路には駅伝の制が施かれて「參天可汗道」と呼ばれ、貂皮を収納してその費用に充てたといわれている(唐会要、卷七三)。さらに、もつと古く遡って漢魏の史書を披見しても、丁零や堅昆などから産する珍奇な毛皮に深い注意が払われているのを知ることができよう(魏略)。北方産の珍しい毛皮類が、交易や収奪によって早くからモンゴリア遊牧民の手に入り、さらに遊牧民の中継商業によって中国にまで転送されていたことが確かめられるのではないか。なお、キルギスに関する「新唐書」の伝えを見ると、該地の婦人たちが毛織物や絹織物で衣服を作っている旨間伝えてあり、それらの織物がトゥルスタンの商人の手で販売されていると説明してある。このような異国の産物が森林民キリギズにまで転送されていたことは、確かに一つの驚異であるが、その代償として西方商旅が齎したものが貴重な毛皮類であったことは、ほとんど疑いを容れない。

このように解明すると、シベリアにおける狩猟は、たとえ部分的であったにせよ、甚だ古い頃からすでに衣食を求める手段だけに止まらず、商品としての毛皮を獲得する段階にまで達していたし、またそれによって、この寒冷な森林地が、アジアの他の地域に結びつけられていたことも、併せて明かになったと思う。問題の土地シベリアから、マンチユリアを貫いて中国に向う商業路、またモンゴリアを縦断して中国に届く貿易路、あるいは金山(アルタイ)、天山あ

たりからトゥルキスタンを経由する隊商路、ないしウラルを越えてロシアに及ぶ商路など、数えあげればなお多くの交通線を指摘できるが、これらの路こそ、シベリアから毛皮を運びだし、逆に遊牧民や農耕民側からの商品を森林の奥に届けたものであり、しかもこのような作用によって、アジアの血管ないし動脈の役割を演じつつ、極北の森林地をアジアの身体の一部として生かしていたといわなければならない。これを樹海の民の側からいえば、彼らは彼らの産出する貴重な毛皮を以て、早くからアジアの動脈の一端に連結していたのである。それならば、彼らを以て、アジア大陸の一角に置き忘れられた孤児と見なすことは、絶対にできないであろう。

この問題に関して、私はもうひとつ重要な事実を報告しなければならぬ。それは、西暦第十七世紀前半ごろロシア人がブリアートーモンゴル族について書き残した文書に見えるもの。そのころ、ブリアートーモンゴルがバイカル湖地区で狩猟、遊牧、および農耕を営み、有力な存在であったことは、さきほど触れた。ロシア側の文書によると、彼らは、トゥルキスタンのブラ汗国の商人からいろいろな織物をたくさん買いこんでいたほど、商業的活動が顕著であり、ことに、彼らが奥地のトゥングス人に家畜や黍を売って黒貂の皮を買いとり、一方、その黒貂の皮を以てモンゴリア方面の銀、銅、錫などと交易していたのに注目される(註)。この場合、ブリアートーモンゴルは、モンゴリアの人たちと奥地トゥングス人との中介者であり、黒貂皮によって中継商業を営んでいるではないか。それゆえに、アジアの各方面からシベリアに届く血管は、シベリアの内部でさらに細かく、かつ複雑に分岐していたと断定できるであろう。アジア史上におけるシベリアの立場は、まことに無視できないのである。

(註) クドリヤツエフ(蒙古研究所訳)「ブリヤート蒙古民族史」所収。「ブラト人の土地の商品は黒貂、狐、海狸にして、またブラト人の商品たる絹切、捺染更紗、ゼンデン織、絹物、白布が豊富にして、且つ良質の銀多く、また馬、牛、羊、駱駝は無

数、穀物は大麦と蕎麦を作りある由なり」(一一頁)「キレンガ河に沿いてトウングス人多数住めるも悉くヤサクをツァーリへ納むるに非ず、しかしして黒貂を家畜及び黍と交換にてブラト人へ売り渡せり」(二〇頁)「銀はムガルより入り来るが、ブラト人はその銀を黒貂によりムガル人より買う」(二三頁)。

ところが、こうして毛皮によって生きたシベリアの森林民は、皮肉にも、毛皮によって滅んだ。西曆一五七九年、コサック部長のイェルマクが、ロシア勢力の急先鋒としてシベリア侵略の端緒を作ったことは、改めて説くまでもなからう。シベリア産の珍しい毛皮が、ヨーロッパの市場にものすごい歓迎を受け、そのことが毛皮の中継者ロシア帝国の野望を刺激して、シベリア併呑にのりださせたわけである。つまりロシアの東侵の楔機が毛皮貿易とその資源の独占にあったことは、あまりにも明白である(渡辺庄二郎、毛皮獲得と民族の発展)。けれども、高貴な毛皮にあこがれて、シベリアの狩猟民を自己の政治支配下に加えようとした運動は、必ずしもロシア帝国を以て嚆矢とはしない。この時を遡る遙かの昔に、いな、むしろモンゴリアが歴史の脚光を浴びたところから、同じような運動は、モンゴリアの遊牧民によって一再ならず示されているのである。匈奴にせよ、鮮卑や茹茹にせよ、また突厥(古代テュルク)にせよ、近くはモンゴル帝国にせよ、モンゴリア高原に強力な遊牧帝国を建設したものは、ほとんど例外なしに、北方の樹海に産する毛皮の中継貿易に熱中し、そのことは、しばしば政治力にまで昇められて、森林民の制圧、ないし征服をさえ導いたのであった。

このような場合、シベリア樹海の居住者は、なぜ無力に近かったのであろうか。気候があまりにも寒冷で、狩猟以外の生産が充分に発達せず、そのために生活の向上が期待できない状態にあったことが考えられよう。狩猟という生活様式が、集団的統制の強化に何の寄与もできなかった点も挙げられよう。また、狩猟を基本とする社会そのもの

が、發展性に乏しいための、必然的な帰結であるともいえよう。たしかに、どれももつともな説明である。しかし私は、これらのほかに、もうひとつの大きな原因を指摘しなければならぬ。それは、シベリアの住民にとって、毛皮こそ唯一の商品であり、他の生産地帯に結びつくたつた一つの手掛りであつた点に求められよう。彼らが輸出した珍貴な毛皮類は、他の生産地帯の人たちにとっては必需品というよりもむしろ奢侈品といえるものではないか。なるほど遊牧民もまた毛皮を衣料とする。しかしその需要は、身近に群る家畜によつて充たされ、必ずしも高価な毛皮を必要としない。従つて、森の民は、いくら大量に貂や狐を狩猟しても、その皮を買つてもらえなければ、何の得るところもないわけである。しかも彼ら自身の生活が、すでに他国との交易に刺激されて自給自足の程度を超えていたとすれば、毛皮を売らなければ求められない必需品も多かつたにちがいない。こんな有様で、どうして彼らに自律性が強まるであろうか。まさしくシベリア古住民の在り方は受身であつて、しらすしらすのうちに、依存的性格が養われてしまつたのも、無理もない次第といわなければなるまい。嘗てのシベリアの悲運を解明するカギは、ここにも見出されるであろう。